千本松原

岸武雄作

梶山俊夫画

千本松原

岸武雄作

梶山俊夫画

少年少女 長編創作選 2
千本松原

■著者 岸（きし） 武雄（たけお）
■発行者 岡本陸人
■印刷 新興印刷製本株式会社
錦明印刷株式会社（オフセット）
■製本 中央精版印刷株式会社
■発行所 株式会社 あかね書房
東京都千代田区西神田 3－2－1 〒101
電話 東京（263）0641〈代〉
1971年6月1日第3刷
■定価 550円

NDC 913 8393-16302-0027

岸 武雄
千本松原
あかね書房 1971
237p 21cm（少年少女長編創作選 2）

©1971 Printed in Japan 著者との契約により検印なし

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

千本松原

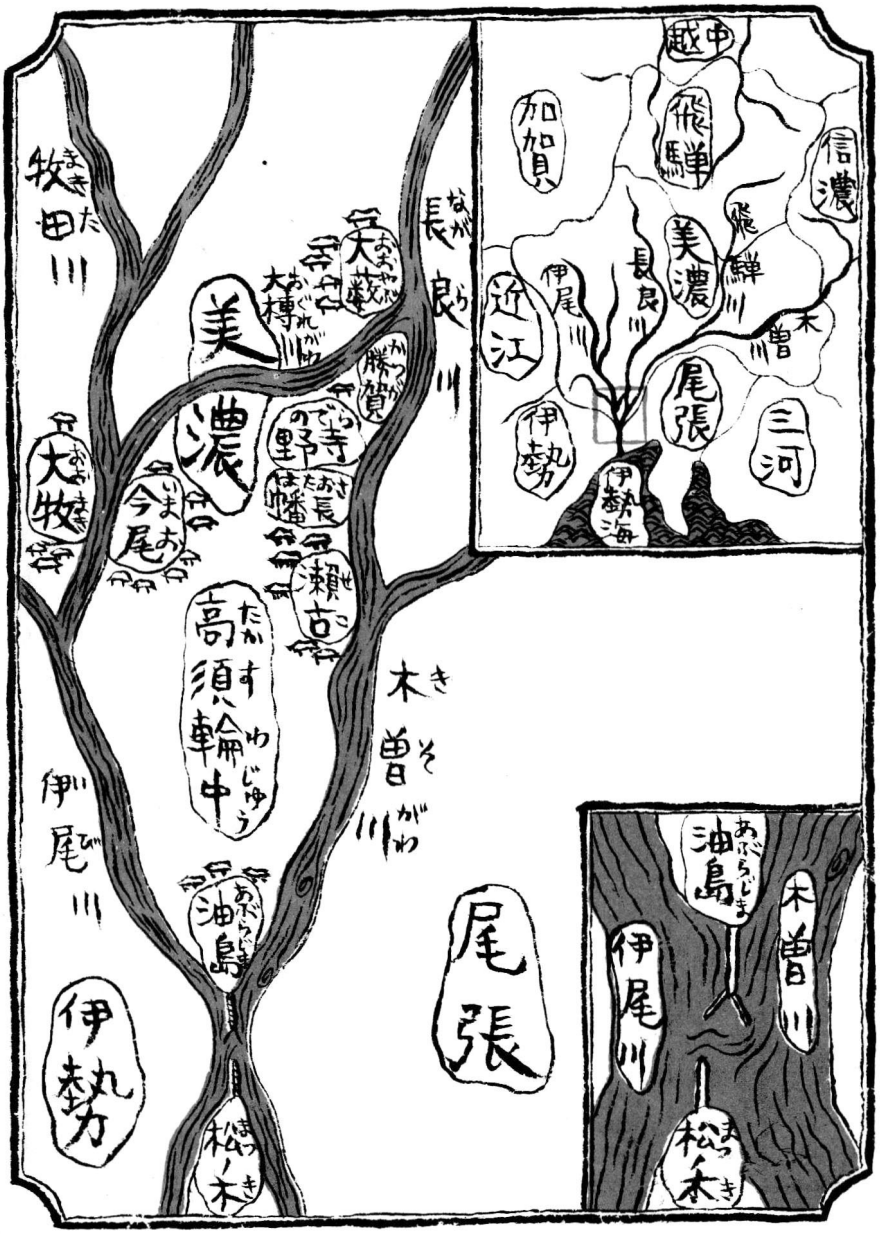
岸武雄作
梶山俊夫画

木曽、長良、伊尾の三つの
川が、一つになって伊勢湾に
そそぐところに、千本松原
という美しい松原があります。
これは、その松原にまつわる
いまから二百余年前の、
男まさしく、またかなしいお話
です。

もくじ

第一章　輪中の百姓たち……七
一　御囲堤……八
二　大榑川……二六
三　あげ舟……四九
四　今尾輪中……六五
第二章　薩摩のさむらい衆……八九
一　耳よりな話……九〇
二　大牧の本小屋……一〇六

三 大籔の川普請……一三四
四 仮小屋のさむらい家……一四三
第三章 水とあせとそして血と……一五九
一 苦しみの四か月……一六〇
二 祭りの夜……一七三
三 油島のしめきり工事……一九一
四 ああ石舟……二一一
その後……二三二
著者のことば……二三六


越中
飛騨
信濃
加賀
美濃
飛騨川
長良川
伊尾川
近江
木曽川
尾張
三河
伊勢
伊勢海
牧田川
長良川
美濃
大垣
大榑川
勝賀
野寺
長番
今尾
大牧
瀬古
高須
輪中
木曽川
伊尾川
油島
伊勢
松ノ木
尾張
油島
木曽川
伊尾川
松ノ木

第一章
輪中の百姓たち

一　御囲堤

与吉は、おとうへのにぎりめしをふところへ入れると、ひとかどの百姓らしく、みのかさで、きりっと身をかためた。

「おっか、それじゃ、つつみへ行ってくるわい。」

「おお、気いつけてな。」

与吉が、かど口の戸をあけようとすると、また、母親のふさは、声をかけた。

「与吉、おまえも来年は十二じゃ。いつまでも子どもじゃないぞ。わるさして、村の衆のじゃまするなよ。」

「わかっとる！　じゃまするどころか、おら、いっしょうけんめい手伝うわい！」

与吉は、ふりむいてどなるようにこたえ、もう一度、かさのあごひもをしめなおした。

外へ出てみると、雨はもう小降りになり、朝ぎりがいちめんにたちこめている。

しかし、よく見ると、前の田んぼは、池のように水があふれ、鉛色の空をうつしてにぶく光っている。

与吉は、雨にあらわれて砂のよくめだつ道を、ぺたぺたと走るように歩いた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ところどころ、みぞからあふれた水が、道に小さな川をつくっている。
水は、いずみからわき出たようにつめたく、また、よくすんでいた。
地蔵堂のそばまで来ると、大きなひきがえるが一ぴき、かたをはりながら、のったのったと道を横切っていた。与吉が、目を光らせて見つめていると、
「えらい雨じゃったのう。」
と、ふいに声をかけられた。
ふりむくと、せなかにコボ(子どものこと)をくくりつけたおけさばばが、かさをさして立っていた。
「うん、……ばばさ、つつみはだいじょうぶかえ?」
与吉が、おとなのような口をきくと、おけさばばは、みけんにしわをよせ、
「そのことじゃて……。」
と、あらためて空を見あげた。
「このぶんじゃ、まず心配あるまいと思うけどな……。なにしろ、男衆は、ご苦労なこっちゃ。ゆんべからひと晩じゅう、土手につきっきりじゃもなあ。……おら、これから五助のやつに、にぎりめしを持っていこうと思ってな。」
「うん、おらも、おとうに持っていくところなんや。」

「そうか、そうか。おっつけ、村のたきだしも、はじまるとは思うけどな。……ありゃ、この道は、いつのまにやら水がのっとるわい。ぼう、まわり道して行くがええぞ。」

「ううん、おら、こんなとこ、平気じゃて。」

「ありゃ、ありゃ。……ほんとに、ガキにはかなわんのう。」

与吉は、おけさばばをのこして、ひざがしらまで水につかり、ジャボジャボ歩いた。

つつみの下まで来ると、川の音がいちだんと高く聞こえてきた。

ゴオッ、ゴオッ。

地面の底から出てくるようなもの音が、与吉のはらにひびいてくる。

与吉は、なんとなしにわいてくる不安と、また、一刻も早くこのおそろしいものを見た

い心のうずきに、もう、じっとしていることができなかった。
与吉は、一気につつみの上へかけあがった。

強いむかい風が、あやうく、かさをとばしそうだった。
与吉はかさに手をかけ、きっと前方をながめた。そして、思わず、
「うおっ！」
と、けものがほえるような声をだした。
いつも見なれたあの美しい木曽川は、もうそこにはなかった。目の前には、まるで生きものとしか思えない、赤茶色のにごり水が、わめくような大声をあげて、走りくだっていた。
与吉は、目を見開いたまま、棒のように立っていた。
それにしても、なんというすごい大水であろう。
むこう岸がはっきり見えないので、与吉には、海のようにも思えた。じいっと見ていると、まん中の水はもりあがっていて、ときどき白い波がしらが、するどい刃物のように光った。そして、そのもりあがった水は、与吉の足もと近くまでおしよせ、チャピッ、チャピッと、土手のぼたに音をたてている。

目を川下のほうにむけると、この赤茶色の生きものは、はるか遠くの雲の中に消え、まるで天にまでのぼっていくように見えた。その天と水のさかいのあたりを、あれはカモメであろうか、無数の鳥が集まって、さかんに舞っている。

いかにもそれはぶきみで、いまにも、たいへんなできごとがおこりそうに思えた。

「おとう！」

不安にたえられなくなった与吉は、からだをくの字にまげて、川にむかってさけんだ。

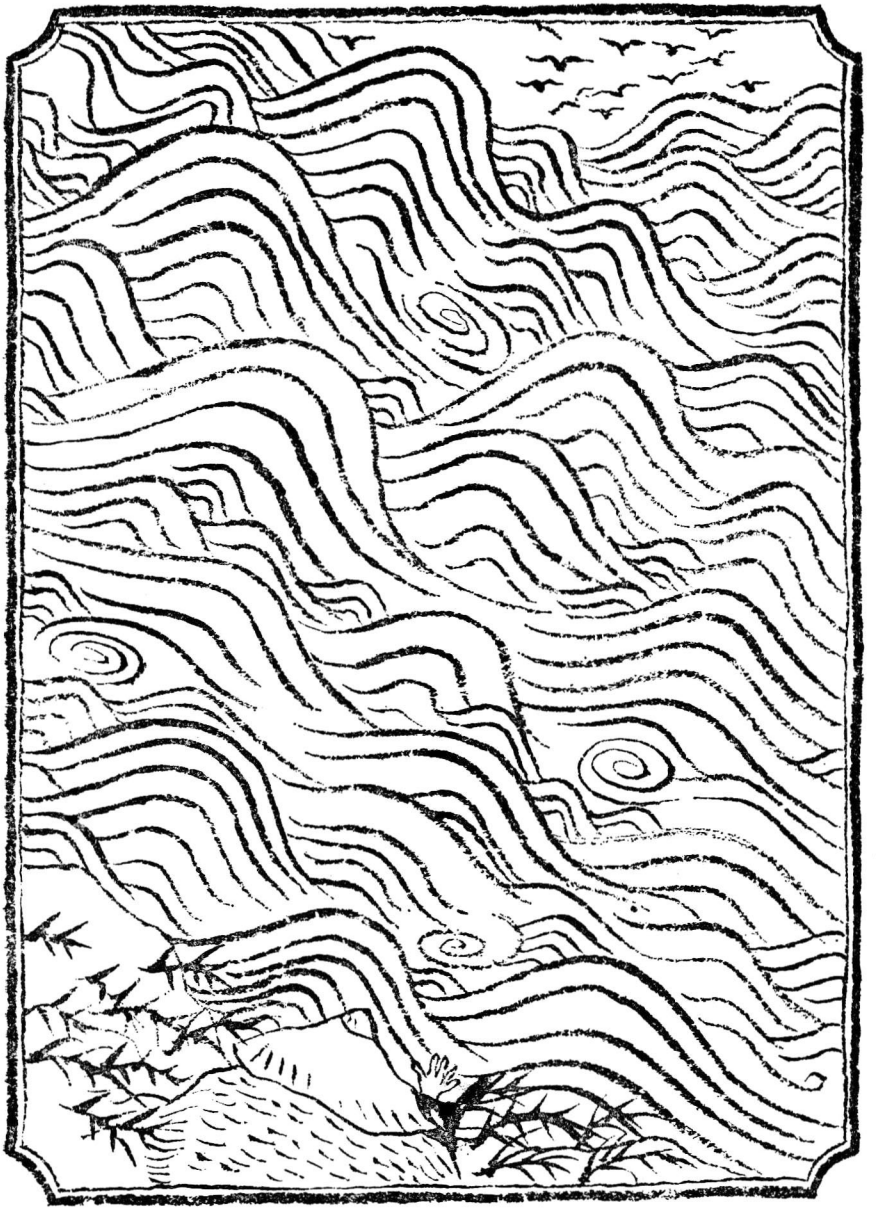
もとより、なんのこたえもかえってこない。ただ、ふきつける風が、にごり水のにおいをいっぱいはこんできただけである。

そのとき、与吉は、いままでわすれていた古い記憶を、ふと思い出したのである。

あれは、いくつのときだったろうか。

与吉は、母親のせなかで、たしかにこのにごり水のにおいをかいだのである。そのとき、母親は必死ににげまわっていたらしい。与吉は、母親のはげしい息づかいと、まわりをつつむゴウゴウという川鳴りにおじけづき、にごり水のにおいの中で、ただ泣きさけんだ。

あれは、夜だったにちがいない。与吉の記憶には、大水の景色よりも、水音や水のにおいだけがのこり、そういえば、ジャンジャンというぶきみな早鐘の音も、このにごり水のにおいの中で聞いたような気がする。



与吉は、おそろしさに、もうじっとしてはおれなかった。
「おとう！　おとう！」
与吉は、風にふかれながら、つつみを川下のほうにむかって走った。

つつみの上には、ゴグラが立てられていた。
ゴグラというのは、いざ大水という場合にそなえて、かけや、くい、板、かます、俵など、つつみを守る道具や材料を平生から用意してある、仲間の倉庫のことである。
ふと、ゴグラに気づいた与吉は、なんとなく人気のあるように思えたので、窓からのぞいてみた。
はたして、五、六人の男衆が、うす暗い中でごそごそ仕事をしていた。
その中に、となりの弥平じいがいるのを見つけた与吉は、やっと元気がでてきた。
かたではあはあ息をしながら、
「弥平じい、おとうはおるか？」
と、いきなりよんだ。
おどろいた顔でふりかえった弥平じいは、与吉の顔を見つけると、にっと顔をくずした。
「ガキ、また、わるさしにきたか。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com